

十 コルネリオ会

(キリスト者自衛官の会)

ニューズレター №23

1978年8月

✿ 啓 示

近來キリスト新聞やクリスチャン新聞の論説に、いわゆる福音派カリベラルか、という問題が取上げられている。これらの論争をもっと客観的な立場から見たらどうなるであろうか。

始めに神は存在するという仮定のもとに出発するとすれば、先づ問題になるのは神の啓示とは何かという事であろう。啓示を普通に分類すると三つになる。第一に一般啓示としては、神の創造になるとされる自然界を通して語られる神の声である。神は万物を作られて、その中に人間も置かれた。神は万物を創造された時、すべてを雑然と作られたのではないようである。万物の間には夫々の因果関係と言おうか、或る法則のようなものがある、これは神の聖なるご性質をあらわしている。そしてその法則は全体としては人間の考えの及ぶような単純なものではない。しかし個々の事柄について考えると、それらの間には割合簡単な関係があり、それは概念的に人間が理解出来る。又これらの関係は総合することも出来るし、分析することも出来る。そして全体として美しい調和の中にある。このことは自然科学だけで止まらず、自然の中に生きる生物、人間の間での思考の範囲についても同様な事が言えると思われる。

第二は特別啓示とされている聖書のみ言葉である。神は万物を作られたが、宇宙に存在する万物だけが神のすべてでない事は明らかであろう。即ち万物を作られた神の次元は、被造物である万物よりも更に高いと考えら

れる。簡単のために一例として、万物を2次元の世界とし、神の世界を更に一段高い3次元とするならば、この3次元上のすべての状態を2次元の平面の状態だけから推しはかる事は出来ない。しかし若し3次元上のある点の2次元平面への投影が与えられれば、これからその近傍の状態は推測することが出来る。聖書はこれらの3次元世界の各点の状況を示していると考えれば、罪によって目が見えなくなった人間に対して神は、聖書という啓示を通して神の国の真理の要所要所を人間に示されたものと考えることが出来る。聖書は神の真理を示すものだから、人間世界の2次元の知識をもってすべてを理解する事は出来ない。

しかし聖書の要所要所の真理は人間の知識を適切に運用する事によって理解する事は可能であり、両者は本質的に矛盾するものではない、只注意すべきはこの人間の個々の理論を無限に延長しても決して神の真理に合致するものではないということである。聖書に示される啓示を理解しようとして合理的に組立てられた幾つかの神学、即ちスコラ学や理神論、それに自由主義神学や合理主義の神学が結局破たんしていたのは多くこの誤りを犯したためと思われる。

次に聖書のみ言葉を研究する上で落入りやすい誤りの一つは無条件に「逆も真なり」とするやり方である。例えば聖書にある警告をそのまま十分条件と取るならば、聖書の内容は大変窮屈となり、且つ聖書のみ言葉がお互いに矛盾するという事態が起りかねない。「逆は必ずしも真ではない」という事実は奇しくも今世紀の電子工学上の最大の発見と言われる半導体の性質がよくこれを象徴している。

次に第三の啓示は直接啓示と言われるものである。聖書によれば旧約の時代には神の使いや神の直接の導びきによって行動した事が書かれているが、現在そのようなはっきりした導びきはない。しかし聖霊による導びきは聖書の約束のとおり現在もたえず我々の上に臨んでいるわけで、それは多く前述の二つの啓示を仲介として働らくが、しかしそれ以外にもそれらと関係なく、しかも異常な物理的現象を供なって働らく事がある。例え

ば断食をして祈っていたら突然光明を得たとか、静寂の中で星のひらめきと共に黙示を受けたとか、聖書の中にも我々の通常知識の理解を超えた聖霊体験の記述はある。しかしそのような物理的異変を供なわなくても、信仰の先輩の所へ相談に行っている時に突然の暗示を受けたとか、伝道会の説教から（必ずしも直接み言葉からではなく）或いは信徒のあかしが引金となって回心をするとか、これらもそこに働られたのが神であると考えれば直接の啓示と言ってもさしつかえないのではなからうか。

しかしここで注意を要するのは聖霊は「イエスをキリストと告白する霊」（Iコリント12-3）だということである。人間は弱いので油断をすれば直ぐ色々な霊の支配を受ける。超自然的な能力を得たからと言って必ずしも聖霊による神からの導びきとはかぎらない。ここで必要な事はその導びきを聖書に示された情報に問う事である。自分の受けた情報を常に聖書からの情報にてらし合せて確かめながら進む時正しい行動を自信を持って推進させることが出来る。これは奇しくも今世紀に於ける精密工学上の大発見フィードバックの理論とよく似ている。

この三つの啓示について矛盾なく行動するという事は天国に於てなら可能であろうが、この世に於ては仲々困難である。油断をすれば直ぐ落入りやすいのは何と言っても我々に理解しやすい自然界から来るものであろう。そして聖書によるならばサタンは今やこの世に君臨しているというのだから問題が起りやすい。次に印刷物の形で我々の与えられている聖書であるが、之も印刷された文字に困執するならば硬直して適用不要になるおそれがある。だからと言って聖書のみ言葉をあまり霊的に解釈すると「宣教」の概念が固定して聖書はどこを読んでも同じことを言っているという事になりかねない。何れにしてもこの三者を通して我々に正しい導びきを与えて下さるのはその場その場に於て働らく聖霊のお働らきという事になる。

福音派、リベラルを通じて聖書研究のあり方については慎重を要することである。

✿ 韓国を訪問して

矢田部 稔 (3師団)

韓国OUCの招請を受け本年4月27日から5月2日までの6日間、韓国を旅行したので見聞したこと及び所見を申しあげたい。

その前に、私自身のこと、OUCのこと、私が韓国OUCから招請を受けるに至った経緯などを申しておかなければならない。

私は防大学生時代にキリスト教(プロテスタント)に入信して以来、自衛官の信仰や教会と自衛隊の関係などの問題について23年間あれこれと考え続けてきた者であり、「幹部学校記事」昭和44年8月号に軍隊におけるチャプレン(宗教要員)制度について小論を発表したこともあった。

昭和34年に陸海空自衛官(幹・曹・士)、防大学生等が共に聖書を学び信仰と交わりを深め各々の使命達成に寄与することを目的としてプロテスタントの各教派及びカソリックを包含したコルネリオ会を発足させたが、これは旧陸海軍の信仰者グループの伝統を継ぎ、また後述する米国及び英国OUCの刺戟及び支援を受けたものであった。私は当初からその一員である。

コルネリオとは、新約聖書(197ページ)「使徒行伝」第10章に記されているが、ユダヤを占領していたローマ軍の将校の名である。

ユダヤ人からみればコルネリオは憎むべき外国人であり、ユダヤ人最大の財産である神信仰を分かち合うなどとは思ってもよらぬことであり、イエスの筆頭弟子であったペテロも、彼に対する宣教を当初は拒否しようとするが最後はその誤りに気づかされてそれを改め、やがて彼らが信仰の同志として結ばれる経過が書かれている。

キリスト者自衛官達はこの故事にあやかろうとしたわけである。

OUCの歴史は随分古く、1851年英国陸軍で生まれたものであるが、第二次大戦中の1943年米国で発足して以来急速に各国に広まり、今日ではアジア、アフリカを含む世界各国のキリスト者陸海空軍人及びその家族を結合さすものとなっており、おおむね4年ごとに世界大会を開いている。

一昨年、米国ヴァージニア州において22箇国から約六百名の軍人及びその家族が集まり第7回世界大会を開いたが、私は日本コルネリオ会代表の一人としてこれに参加し大きな感銘を受けたのであった。

一週間続いたこの大会で韓国代表の一人、金斗植氏と親しくなったわけである。同氏は、長老派教会牧師、神学博士、空軍チャプレン長であり空軍中佐であったが、その後大佐に昇進、本年になって退役し長老派教会巡回牧師に就任された方である。

韓国OUC陸海空三軍総会長から招請を受けたのは、同氏を通じてであった。

諸上司の御理解と御支援により、私は海外渡航承認をスムーズに受けることができたが、ただその際、近時朴大統領とキリスト教会が対立している如く報ぜられていることからこの点に注意するよう指導を受けたことであつた。

特殊な状況下にある現在日本の教会人の意識は更にこれに輪を掛けたようなものであり、韓国の教会は朴大統領に締めつけられ窒息一足手前のところで喘いでいると思っている人が少なくない。

私の結論を先に申すと、それはとんでもない誤解であり、韓国の教会は実にのびのびと活躍しており、特に軍隊におけるキリスト教は着実に進展していると見受けられた。

出発の日、4月27日は日航のストのため予定していた航空便が利用できず、大韓航空便で釜山まで行きそこから国内線でソウルに到着し直ちにタクシーで旅館に行くという方法をとったので、韓国OUCが私を驚かすため私に内緒で準備していた次の二つがフイになって了った。

それは、豪華なレストランで予定されていた韓国OUC総会長退役海軍少将申泰英氏主催の夕食会とそれに引続きYMCA会館毎木曜夜の、定例OUC集合に出席して私がスピーチをすることになっていたことである。

もともと、レストランでは予約の取消しができない時間となっていたので、総会長以下6名が7名分の食事をとったとのことである。また、YMCAでは、30名くらいのメンバーが集まり特に夫人達は遠来の客をもてなすため銘々手作りの御馳走を持参していたとのことであった。

更に、申し訳なかったのは、金斗植氏と空軍チャプレンの金中佐、陸軍チャプレンでOCU総務の温中佐の3名が空港国際線（国内線でなく）で2時間半も待っていてくれたことであった。そんなことを知らない私は既に夕食と風呂を終えオンドルのある部屋で寛いでいた。

次の28日は板門店を見学することにしてしたが、その出発前に金氏が旅館まで来てくれたので、前夜の顛末やじ後の詳しい予定などをはじめて承知することができ、彼らの律義さに頭のさがる思いがした次第であった。また、この際、大変多忙なOCU総会長を私が訪問する時間を翌朝、やっと約束できたと云うので、退役海軍少将は現在どんな仕事をされているか質すると水産庁長官とのことであった。

板門店から帰り、金氏の自宅で夕食をいただき、長いチャプレン生活のアルバムを見せてもらったが、その中には空軍士官学校の卒業式において牧師ガウンを着用した同氏が説教しているかたわらに朴大統領夫妻が来賓として着席されている写真もあった。

次の29日は、ソウル駅前、大宇ビル18階の水産庁長官室で申総会長から私の名前が刻まれた訪韓記念盤をいただいた。

空軍本部チャプレン長室では、5名の空軍チャプレン（プロテスタント3名、カソリック1名、仏教1名）及び同行の金氏と温中佐の計7名から、韓国軍隊におけるチャプレンの働き、OCUの組織と活動、韓国教会と軍隊との関係等について説明を聞いた。

朝鮮戦争勃発後8箇月を経た1951年2月、韓国軍のチャプレンは生まれたのであった。現在のチャプレンの総数は陸軍270名、海・空軍（正確

な数は聞きもらしたが) 70～80名である。

韓国軍隊における精神的分野の殆んどはチャプレンが担任する。チャプレンは(1)日曜の宗教行事(礼拝、ミサ、仏教集会等)の執行、(2)水曜夜の聖書研究指導、(3)カウンセリング、(4)訪問、(5)宗教講話等を行う。

宗教行事は希望者のみが参加するが、宗教講話は月1回1時間程度のもので全隊員が参加しなければならない。空軍の本年各月の宗教講話テーマは、(1)信仰を通じた勝利、(2)犠牲的奉仕生活、(3)自由を守ること、(4)生命の尊厳性、(5)幸福の開拓、(6)民主市民の理想、(7)使命の完遂、(8)民族の誇り、(9)隣人愛、(10)小さいことに対する忠実、(11)実のある人生、(12)人間生活の反省、となっている。

朴大統領は全軍人に対し「一人一教」すなわち、各自はいずれかの信仰を持つことを呼びかけており、チャプレン達は勿論指導官達やOCUメンバーもその達成に努めているが、現在約63%が信仰を持つようになっており、その約80%がキリスト教である。

その日(29日、土曜)の午後1時から、ソウル北方で実戦配備についている第25師団の練兵場では、司令部第三部長を筆頭に将校28名を含む1527名が集団洗礼を受けることになっており、軍隊のチャプレン30名とソウルの永楽長老派教会朴牧師をはじめ一般の教会の牧師10名合計40名がちょうどその頃練兵場に集合中である。一個師団で3千4百名が集団洗礼を受けた例もある等々の話であった。

日本の現状と比較し何と大きな違いであろう。

同じ建物の中にある空軍施設監の部屋に行く。施設監李准将は空軍OCU会長である。会長のほか准将1名、大佐・中佐など合計7～8名が待っており、そこで記念品の贈呈を受けた。しばらくのこん談のうちに土曜日の課業終了の号音が鳴ると、3～4台の車に分乗して市内レストランへ行きは食会となった。

李准将は、日本自衛隊の精神教育は何に基づいてなされているか、キリスト教なしで共産主義に対抗することが可能であるかと質問していた。

次の日、30日は日曜である。陸軍本部構内にある陸軍中央教会のチャプレン室に行き、チャプレンや陸軍OCUのメンバーとこん談していると陸軍参謀総長李世鎬大將が私服ではいって来られたので挨拶を申しあげた。

間もなく礼拝が開始された。円型礼拝堂の出席者は約三百名。制服や戦闘服の兵士及び私服の将校とその夫人達がほぼ半々というところ。婦人兵も多い。約50名の男女兵士で構成された聖歌隊。説教者を含め3名のチャプレンがガウン姿で着席した講壇。婦人兵の讚美歌独唱。説教は、陸軍チャプレン長呉錫用大佐による旧約聖書「出エジプト記」第17章8～16節をテキストとする「勝利の秘訣」と題するものであった。

李大將は牧師の子息であり、毎日曜の礼拝を陸軍中央教会でされるとのこと。大將の夫人は別の教会の長老で、またOCU夫人会の会長でもあり、毎第一日曜は夫妻そろって陸軍中央教会に出席されるとのことであった。

礼拝が終ると同じ陸軍本部の構内にある陸軍クラブで陸軍OCU会長主催の昼食会が準備されていた。会長の軍医総監・李少將の他に陸軍中央教会OCU会長の林准將、大佐5名、中佐2名、金氏と私の合計11名であった。

席上、韓国OCUの活動の様子を色々と聞かしてもらったが、OCUはチャプレンとよく協力し各種の集会、行事を実施しているとのことであった。

話が逆向きとなり日本コルネリオ会のことを聞かれると苦しい思いがした。会員数は予備役を含まず現役のみで約一万名を数える韓国OCUと一名のチャプレンもいない総員約百名の日本コルネリオ会との差は大きい。

夜は、サボイ・ホテルのレストランで海軍OCU会長主催の夕食会に招かれた。会長の海兵隊参謀長林少將、海軍憲兵監金准將、金氏、温中佐、私の5名であった。海軍の本拠地は釜山に近い鎮海にあるのでソウル地区には人員が少ないとのことである。

林少將は若い頃から海兵隊の荒くれ武士として名が通り、チャプレンを殴り飛ばしたこともあったそうであるが、結局はチャプレンの導きで信仰

に入ったとのことである。少将は、海上自衛隊の多くの将官を御存知であった。

次の日、五月一日は高速バスで慶州に行き新羅の遺跡を見学し、二日は釜山を出発し帰国の途についた。慶州ではOCUのメンバーである海軍浦項地区憲兵隊長の海兵中佐が案内をしてくれた。

話は前後するが、日曜日には前述のOCU関係行事の間にソウル市内のキリスト教会を見て廻った。一番古い(1893年創立)勝洞長老派教会、礼拝出席1万人という最大規模を持つ永楽長老派教会、カソリックの代表である明洞カソリック教会の三箇所である。

子供達のための教会学校が始まる頃に行った勝洞教会では一人の教会役員から説明を受けたが、長老などの役員数202名。前週日曜11時からの礼拝出席は1298名。最近買いとった隣接の土地に近々何億円かを投じて教会教育館ビルを建設し、将来は礼拝堂も建て替える計画であるとのことであった。

そのほかソウル市内には大小の教会堂が多く、釜山も同様である。また板門店近くや、高速道路沿いの農村でも堂々とした教会堂が部落ごとくらいに立っている。総人口3500万のうち仏教1000万、プロテスタント500万、カソリック100万とのことであるが、キリスト教は実質的に韓国社会を支え導く社会力となっていると見受けられた。

ソウル市内パゴダ公園に行くと、日本の統治に反対し1919年3月1日この公園を中心に全国各地で独立宣言書が読み上げられ、更に激しくなった日本官憲の弾圧に屈せず戦った独立運動絵巻物語が壁画風彫刻として作られている。

独立宣言書の起草者33名のうち16名は牧師または教会長老であった如く、韓国独立運動の当初からキリスト教会が大きな役割を果たしたのであり、また、そのためキリスト教会の被害も大きかった。焼打ちにあった教会もあった。

現在の韓国教会も国家と激しく対立しており、かつての統治者と戦った

ような戦いを続けているので、それを激励し、それと連帯し、あわよくばそのエネルギーを日本にも分譲してもらおうと云う人がいるが、その認識は、既に結論として申しあげてあるように、事実と大きく隔っているようである。

※ 日米合同集会

本年度春の日米合同集会は 53.6.10 (土) 市ヶ谷会館一階広間において開催された。

今回の集会の目的は、コルネリオ会員相互の親睦のほか、近く本国に転勤される予定の在日米軍OCU代表エマソン中佐への感謝状贈呈、旧海軍潜水艦乗組員で戦後献身されて現在日本聖書神学校校長をしておられる新屋徳治師の歓迎、および元米国OCU会員で現在福音宣教のために東京に来ておられるマドック氏夫妻を歓迎するためであった。

そのスケジュールはつぎのとおりであった。

14:30 ~ 受付

15:00 ~ 開会、あいさつ (武田会長)

祈り (千葉牧師)

さんび (みよや十字架の) 379

聖書 マルコ 10-42~45

説教 「キリストのしもべとして」(新屋牧師)

さんび (十字架の血にて) 515

祈り (エマソン中佐)

17:30 ~ エマソン中佐への感謝状贈呈

証詞 (マドック師、今村兄)

18:30 ~ 会食

19:30 ~ 自己紹介および自由時間

20:10 ~ さんび (神ともていまして)

20:30 ~ 祈り 解散

出席者

日本 武田貴美会長夫妻（元陸将）、千葉愛爾師（久里浜教会牧師）、
 新屋徳治師（日本聖書神学校々長）、●今村和男兄（防大）、本代稔兄（技
 本）、堀内候穂兄（防研）、●森田忠信兄夫妻（救難航）、目良洵兄（空幕）
 山口利勝兄（空幕）、滝原博兄（プログラム管理隊）今井健次兄（防大）
 米国 Emerson 中佐夫妻、Greshel 中佐夫妻、Robinson 少佐、
 Steel 大尉夫妻、Deisher 姉、Hedeem 姉、Madoc 元大佐夫妻、
 なお、次期在日米国OCU代表は Steel 大尉です。

● キリストのしもべとして（集会説教要旨）

新屋 徳治 師

皆さんにお話するのは今日が始めてなので、あかしをさして頂きます。
 私は戦時中海軍兵学校を卒業してから、潜水艦の水雷長をやっておりまし
 た。

ガダルカナル島の沖で艦が沈んだ時、多くの水兵達は死にましたが、自
 分はわずかの傷を受けただけで助けられ、米国軍につかまり捕虜になりま
 した。それでガダルカナルからニューカレドニアに行き、約三年間捕囚の
 生活をしました。

日本軍にとって敵の捕虜ほりよになることは死にまさる恥になる事でした。そ
 こで死にたいと思う心がありましたが、それと共に生きたいという本能も
 ありました。その頃、日本にも来た事のあるチャプレンが収容所にやっ
 て来て英文の聖書や文書を我々に贈ってくれました。始めはキリスト教を日
 本の国体に反するものと考えていましたので、とてもそれには親しめな
 かった。そして自分の問題、人間の問題に苦しみましたが、その後、段々に
 キリストが私に話しかけるようになり、やがて十字架の信仰、神の召しを
 与えられ、日本に帰ることが出来たならば伝道者になる以外に道はないと
 思うようになりました。1946年2月LSTで日本に帰ってから日本

聖書神学校に入りました。卒業してから四年程田舎の教会で伝道をしましたが、その後シカゴのマコミック神学校に入りました。そこで旧約聖書の勉強をして1958年帰国してから日本聖書神学校で教育に当たっています。

今一人のクリスチャンとしてどう生きるかについて常に考えている事を話したいと思います。

米国に留学していた時、アナポリスの海軍兵学校を見学した事があります。そこで意外な事を知りました。それは兵学校の卒業式の時、成績最下位の者を皆で胴上げするというのです。この者を Anchorman といいますが、それ以後この言葉が好きになりました。このいかり (Anchor) から自分はクリスチャンとして三つの事を教えられます。いかりは海底に深く沈んで船を守ります。沈む事を精神的に深く考えることが大切です。多くの人があまりに皮相的な事に時を費やしすぎる、そうではなく沈む事が必要だと思います。この時(詩 46-10)の聖句の意味がわかります。次に海底に沈むと人々の目からかくれてしまいます。

信仰生活ではこのかくれる事が大切だと思います。それは(マタイ 6-1~6)によります。またいかりが一番低い所に位置しております。人間にとって低くなる事、本当の意味の謙遜が一番大切だと思います。それは(マルコ 10-42~46)の意味を示しております。

✿ 通 信

- 日本リバイバルクルセード主幹の滝元明牧師からコルネリオ会の働きのために、励ましのお便りを頂きました。感謝。
- 横須賀市、日本基督教団田浦教会の鈴木崇巨牧師から 励ましとご挨拶のお便りを頂きました。先生は東京神大ご卒業後、市川市、舞鶴市で伝道の後、四年間米留し、牧会学の博士号を取り、三年前帰国、現在田

浦教会で伝道され、横須賀地区でご活躍です。防衛大学にもお訪ね下され、伝道の意欲をお持ちです。感謝。

○ 滝原博兄（プログラム管理隊・3空佐）

「先般のOCU集会、皆様の心からのご支援により、司会の出航が危ぶまぶまれながらも、無事難破もせず目的地に着くことができました。

私個人として、これにより靈性が強められ、奉仕教会におきましても、大いに参考になることであり感謝しています。昨年までは、ただ家族全員を引きつれて席を暖ためる信者であった私にとり、奉仕の尊さを体験し、その務めの中に靈性が高められるものであることを、奉仕教会での働き、今回のOCU開催の準備（約2ヶ月）および司会役を通して体得しました。感謝。」

コルネリオ事務局

（日本OCU）

横須賀市走水一丁目 防衛大学校

応物教室 今井教授気付